
暁に咲く華

霜月千鶴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暁に咲く華

【Nコード】

N6842Y

【作者名】

霜月千鶴

【あらすじ】

数年前、妖怪が人々を襲い、多くの人が死んだ。

国は二度とその悲劇を起こさないように「狩人」の集団をつくる。だが、天宮風華と叶鷹斗は狩人でありながら、国の狩人集団に属していなかった。

ただ、お互いの目的のためだけに。
そんな二人に手を差し伸べたのは。

第一話「華と鷹、二人きり」（前書き）

- ・この小説は一次創作です。実在する人物、団体、出来事等とは一切関係ございません。
- ・誹謗中傷等はお辞めください。

第一話「華と鷹、二人きり」

未だ朝陽も昇りきらない頃、陽霧市ようぎりしという人口約二十万人、縦横三十キロメートルの市のはずれの森林、其処に十代半ばらしき少女が居た。

少女は濃い紫色の、傷一つ無いさらりとした長髪で、目は茶色と一般的な色でありながらその目から放たれる眼光は鋭く鋭利な刃物を想像させるが、肌は眼光とは逆に柔らかそうで、透き通るように白く、目鼻立ちはすっきりしており、凛々しさや凶暴さが見え隠れする整った顔だちだった。

ただし、動きやすそうな服の胸部は残念な程平らである。

少女の名を、天宮風華あまみやふうかと言った。

「逃がした」

風華は舌打ちする。

風華の手には、短刀ナイフが握られていた。

短刀の刃先からは、半透明の液体が滴り落ちている。

その半透明の液体が地を僅かに濡らし 半透明の液体が濡らした部分は、やがて溶けていった。

毒だ。

「鷹斗たかと！ そっちは！？」

風華が居る其処よりさらに緑の深い場所に向かって、風華は叫ぶ。するとがっさがっさという音とともに、風華と同じ年齢らしき少年が姿を現した。

髪は黒茶色の短髪で外ハネしており、目は銀灰色と変わった色で恐怖を抱かせそうだが、目は眠たげなためさほど恐怖は無く、むしろ気だるげだが目鼻立ちはすっきりしており、肌は風華のように透き通るように白く、儚さのある人目を惹く程端整な顔だちをした少年だった。

だがその端整な顔だちを台無しにするように、黒シャツは盛大に

乱れており、ジーパンの所々に葉をくつつけている。

名を、叶鷹斗かのうたかとと言った。

こう言っでは失礼だが、彼の容姿から「鷹」は誰も想像出来ないであろう。

長年行動を共にしてきた、風華以外は。

鷹斗は首を大きく縦に振った。

「倒した」

鷹斗は草むらに手を突っ込んでそれを引っ張り出した。

がっさがっさがさあつと盛大に草が揺れ、血で赤く染まった鷹が出てくる。

否、ただの鷹では無い。

縦横一メートル以上はあり、足の爪も三十センチ程で刃先のように鋭く、翼に至っては羽一枚一枚が刃のように鋭く硬い。

このような通常の生物とは異なる者達を、妖怪と呼ぶ。

ただし、このようにわかりやすい者ばかりではなく、誰かの心の闇に妖怪が付け込んで、その誰かを操る場合もあるから要注意である。

数年前、人々をこの妖怪が襲った。

死者九百二十名、重傷者千五百五十名。

当然、国に大激震がはしった。

国は其処で一つの措置をとる。

ハンター
狩人。

中には特殊能力を持つ者も居る。

風華と鷹斗も狩人ではあるが、他の狩人とは違う。

大抵の狩人は国の組織に入り、四人一組、多い時は六人一組で動く。

だが其処に個人の意思は関係ない。

それを嫌い、風華と鷹斗は手を組んだ。

風華は風華の目的のため、鷹斗は鷹斗の目的のために、狩人をしている。

そして、二人一組という一人対一人になることで、お互いのために自由に動くこともできる。

それに二人は幼馴染だったし、お互いのことはよく知っていた。国のため、顔も知らぬ誰かのためには頑張れない。

それが二人の共通点でもある。

風華はベルトからプラスチック製の注射器を取り出して、その妖怪の鷹の腹部に注射針を突き刺す。

みるみる内に、注射器の中に妖怪の鷹の血が溜まった。

「ほら鷹斗、腕出さない」

「此処で？」

「家帰るまでもたないでしょ」

鷹斗は腕をまくる。

風華は特に注射針を刺す場所も選ばず、鷹斗の肘と手首の中間辺りに突き刺した。

「……っ」

鷹斗が一瞬痛みに眉根を寄せる。

注射器の中の血が、鷹斗の体内へと流れ込んでいく。

四十秒もしない内に、注射器の中の血が無くなった。

風華はポケットに突っこんでいたコットンを取り出すと、注射針を刺している場所にあてつつ、注射針を引き抜いた。

「……もうちょっと丁寧にできない？」

「悪かったわね、雑で」

鷹斗はあいている方の手でコットンを押さえる。

鷹斗は特殊体質だ。

一日最低一回、妖怪の血を体内に取り入れなければ生きていけない。

最初から、ではなかった。

あの数年前の事件をきっかけに、鷹斗の体内の何かが狂ってそうなってしまったのだ。

「帰るわよ。学校があるし」

「うん」

鷹斗は頷き、そして横たわっている血塗れの鷹を見る。

「……鷹^{これ}、どうする？」

「放っておきなさいよ。何かの餌になって自然と滅びるって」

寒風が、風華の長髪を揺らす。

もう冬も近い。

でも、風華達は目的を果たすまで季節の行事には関わらないだろう。

「帰るわよ」

もう一度、風華は言った。

続く

第一話「華と鷹、二人きり」（後書き）

（後書き）

初めまして、霜月千鶴です。

初シリアス？ファンタジー長編を書かせていただくので、ちょっと緊張しております。

初長編なので色々至らないところはあると思いますが、なにとぞ温かい目で見、楽しんで頂ければ幸いです。

では。

この辺りで。

第二話「猫と風船」

陽霧市のほぼ中心にある高校 霧陽^{きりび}学園高等部に、風華と鷹斗は通っていた。

朝八時丁度。

紺色のセーラー服を着た少女や紺色の学ランを着た少年たちが昇降口に雪崩れ込む。

その様子はタイムセールに食いつく人々を思わせる ほどではないが、ちよつとした戦争状態だ。

「だから言つたよね。八時は止めようって」

「……眠かつたから」

風華の咎め口調に動じず、鷹斗は気だるそうな声で答えた。

あの後古びた洋館 通称・人の住むお化け屋敷に帰った二人は、朝食をとって着替え、そのまま学校へやってくるはずだった。

だが本能に従順な鷹斗は、眠気に抗うことすらせずぐっすりと眠ってしまったのだ。

それ故七時五十分には学校につくはずが、八時丁度についてしまい、今に至る。

「明日も眠つたら置いていくからね」

そう言いつつ、それが実行できない自分は相当甘いのだろう

風華は昇降口に集中する人々を横目で見つつ、苦笑した。

昼食後の授業は眠い。

それは狩人^{ハンター}であつても変わりはない。

風華は窓際の席で授業を聞きつつ、欠伸を噛み殺した。

廊下側最後列の席に居る鷹斗を見た。

鷹斗に至つては授業中にも関わらずぐっすり眠っている。

黒板に向かつていたはずの男性教師が、鷹斗を見て額に青筋を浮かべている。

（馬鹿……）

そう思う風華も、目がとろんとしている。

「大体、こんな気持ちいい日に授業なんてあるのが間違ってるんだって……」

十一月にもなつて、こんなに気温が丁度いい日なんてめったにな
い。

そう思うと、鷹斗の気持ちも分からなくはないと思えてきた。

こんなに平和だと、あの数年前の大惨事が嘘のように思えてくる
だけど、この教室で普通に過ごす人々も、心に傷を負っているの
だろう。

風華が何となく窓の外に目を向けた時だ。

「ね、ねえ、何アレ!？」

「猫……?」

教室がざわついてくる。

風華もそれに気付き、目を鋭くさせた。

ただでさえ鋭い眼光が、さらに鋭くなる。

グラウンドに、黒猫が居た。

ただの黒猫では無い。

縦横三メートル以上あるだろう。

丁度耳あたりが、この教室　二階にある二年二組の窓と同じ高
さだ。

「妖怪か!」

風華が叫ぶと同時に、巨大な猫が一鳴きした。

にゃおおーん、と。

巨大な猫の鳴き声は、窓を揺らす。

耳に突き刺さるような声だった。

風華が反応するよりはやく、巨大な猫が地を蹴って跳躍した。

「嘘っ!!!」

「何で……!!」

教室から悲鳴じみた声があがる。

巨大な猫が風華のすぐ横にある窓を頭突きで破る　前に、鷹斗が風華のすぐ横にある窓を蹴破つて、巨大な猫を蹴飛ばした。巨大な猫が数十センチ後ろに飛び、グラウンドの地面に叩きつけられる。

土煙が二階の窓まであがった。

鷹斗の身体が、一瞬止まって　。

「あ」

下へ落ちていく。

「馬鹿っ！！」

風華が鷹斗へ手を伸ばす。

鷹斗も風華へ手を伸ばすが、虚しく空を切った。

風華が窓枠に足をかけ、飛び降りる。

足から飛び降りれば、身体への負担は少ない筈だ。

そして始めから真下へ飛び降りれば、真横　直線状に飛び出した鷹斗よりはほんの少し早く着地できるはずだ。

教室から悲鳴じみた声が上がる。

風が、風華の髪やスカートを激しく乱した。

鷹斗より早くに地面につくと思っていた風華は、隣を見て呆然とした。

鷹斗の方が二十センチほど下に居る。

鷹斗の狩人としての秀でた能力とえば、すさまじいスピードと見た目に反する剛力だ。

落下からの着地には向かない。

（駄目だ……！）

思わず風華が目を閉じた時だった。

「玉風船・二」
たまふうせん

グラウンドの鷹斗が落下する先に、豆粒四粒程の大きさのゴムボールが現れる。

風華の落下するであろう先にもだ。

その球はみるみる内に膨らみ、縦横五十センチ程に膨らみ、風船バルーンのようになつた。

巨大な猫がそれに気付いて、巨大な風船に突進していくが、どこぞのギャグ漫画のように呆気なく弾き飛ばされた。

「……っ」

「うわっ！」

鷹斗が先に風船に沈むように落ち、風華が続いて風船に沈む。

「何……？」

とりあえず助かった。

そう思った矢先、鷹斗の頭上に影が出来る。

あの巨大な猫だ。

だが、どう考えても鷹斗が有利だった。

前述の通り、鷹斗の秀でた能力はどちらかというと特殊な方に分類され、素早いスピードと剛力をもつ。

巨大な猫が、巨大な風船の鷹斗の居た場所を叩く。

その猫の爪が食い込んで、風船が盛大に破裂するが、其処に鷹斗の姿は無かった。

その猫の頭上に鷹斗の姿があつた。

鷹斗はそのまま巨大な猫の脊髄辺りを軽く蹴飛ばした。

それだけで充分だった。

地面に巨大な猫が叩きつけられる。

砂埃が、辺り一面を覆う。

「ごほっ、ごほっ………！」

「風華、無事？」

「う、うん」

風華は巨大な風船からゆっくりと下りる。

同時に、巨大な風船がしぼんだ。

「……何なんだろう、これ」

鷹斗の背後から、巨大な猫が突進してくる。

未だ諦めて無かったのだ。

風華は慌てて鷹斗を突き飛ばし、スカートのポケットに忍ばせていた毒の仕込まれた短刀^{ナイフ}を猫に向ける。

砂埃を巻き上げて突っ込んでくる巨大な猫の目には、怒りだけでは無い　戸惑いや悲しみが浮かんでいた。

（まさか……！）

妖怪のものではない感情。

風華は短刀をポケットにしまい、代わりに硝子の小瓶を取り出した。

巨大な猫が前足を風華に振り下ろすと同時　。

風華は、硝子の小瓶を巨大な猫へと投げつけた。

続く

第三話「生徒会長」

「ん……」

華は目覚めると、視界は真つ白な天井でいっぱいになり、薬の臭いが鼻を突いた。

（保健室……）

病院であれば、此処まであからさまな薬品の臭いはしない。

「あれから、どうなって……」

「ようやった」

聞きなれない男の声と共に、カーテンの開く音がする。

先ほどよりも幾分か明るくなった。

風華がゆつくりと上体を起こす。

「ああ、無理せんでええよ。俺は七原鳥ななはのとり。生徒会長や」

そう言ってパイプ椅子に腰かける男　七原鳥は、白い歯を見せて笑った。

髪は黒色のストレートで肩までの短髪、目は茶色だが何処か野性の動物と同じ様な光が潜んでいるが端整な顔だちであり、身体は鍛え抜いたようで、鷹斗よりは幾分かガツチリしている。

生徒会長であると言っていたが、学ランは着ていない上、シャツは第二ボタンまで外されている。

「あの猫がよう妖怪や無いてわかったな」

「戸惑いがあったからよ」

あのとき、突進してくる巨大な猫の目には確かに戸惑いの色が浮かんでいた。

何故やられているのか、ではなく、何故自分がこんなことをしているのかわからない、といった戸惑いだった。

妖怪ならば、そのような戸惑いは浮かべない。

あれは。

「黒猫の心の闇に憑いた妖怪」

「そや。そやけど、よう聖水なんて持つとったな。国お抱えの狩人ハンターやないんやろ？」

言い方は皮肉じみたものだが、国お抱えの狩人は確かに、聖水をもっている。

妖怪で無い者に憑いた妖怪を祓う水だ。

そうそう其処等をウロウロしている狩人に、手に入れられるようなものではない。

「……関係ないでしょ」

風華はそう言い、そっぽを向く。

生徒会長だかなんだか知らないが、初対面の相手にそこまで話すつもりはない。

鳥は気を悪くするわけでもなく、苦笑した。

「まあ、そやな。あの猫も無事や。鷹斗君が面倒みてる」

鷹斗は面倒臭がりで自由気ままな割に、小動物の面倒を見るのが好きだ。

もってこいの役割だろう。

「で？ 私に何の用？」

「生徒会に入ってほしいんやけど」

「お断りよ」

風華はしつしつと片手で小動物でも追い払うような仕草をした。

「ちよーっとぐらい考えてくれへんと、流石に俺も傷付くんやけど」
「知らないわよ」

「……………」

流石に風華の返答は予想していなかったらしく、鳥は思わず言葉を詰まらせた。

（大体、何で私達が狩人ハンターだって知ってるのに、生徒会に誘うのよ？）
学生で狩人になった人物は、通っている学校の教師や生徒会にも狩人だと知られている。

それは風華達も例外ではない筈だ。

「……今日の所は、ええわ。けど、君たちには貸しが一つあるから

な」

「貸し？」

そんな覚えは一つもない。

保健室まで運んでもらったことだろうか、と風華が思っていると、鳥はあのゴムボールを取り出した。

「それ……！」

「そや。君たちを落下から助けた。これが俺の能力を發揮するための大事な道具つてところやな」

思わず風華の眉間に皺が寄る。

「アンタも狩人？」

鳥は小さく吹き出す。

「そりやそうやる。狩人育成訓練をこなした奴以外でこんな特殊な能力持つとる奴が居^おるとしたら、それは化け物や」

「最初から、その恩を押し付ける為に助けたつてわけ？」

「生徒がピンチやつたら誰でも助ける、それが俺のモットーや。ま、この貸しはいずれ返してくれたら良^ええ。けど、忠告しとくで。……

似たモン同士が出会ったら、不思議と情も湧くもんや。妖怪に情なんて抱くなよ」

風華は眼光を一層鋭くさせ、鳥を睨みつけた。

無意識のうちに、上の歯が下唇を噛みしめていた。

「妖怪に情を抱くつて？ 冗談じゃないわよ。私は妖怪に復讐する！ そして鷹斗は生きるために妖怪を倒すんだから！」

「復讐、生きるため。それは妖怪も同じや。中途半端に一匹狼しとつたら、ホンマに足元すくわれるからな」

鳥は話は終わりだとばかりにパイプ椅子から腰を上げた。

そして一度も風華の方へ顔を向けず、そのまま保健室から出ていく。

若干苛立ったように、びしゃりと保健室のドアが閉められた音が、ひどく風華の耳についた。

「妖怪に情を抱くなんて」

風華が目を閉じる。

瞼の裏に浮かぶのは、あの時の真つ赤な光景。
人だけでなく、床も、壁も、お気に入りだったぬいぐるみも、全
て赤く染まった光景。

涙。

血。

刃。

牙。

叫び声。

復讐の色に染まった自分　。

風華は其処まで思い出して、目を開けた。

「妖怪は、倒すべき敵なんだから」

その言葉はただたんに言ってみただけなのか、あの鳥の言葉を否
定するためなのか、それとも　。

それは、言葉にした風華でさえもわからなかった。

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6842y/>

暁に咲く華

2011年11月23日12時52分発行